

〈論 文〉

「幻想の帝国」 ——日本と朝鮮半島のパラダイム——

重村 智計

Abstract This article titled “Illusory Empire—Paradigm Between Japan and Korean Peninsula” focuses on how the academia in Japan and in two Koreas differ. The different perspectives derive from each nation’s prescribed perception which accumulated over the years. Japan has its own image and interpretation built on its own academia. The Korean academia also constructed its interpretation on Japan as a subject from Korea’s own perception. Japan and Korea each has developed the logic of interpretation from its own illusion far from the objective analysis. For example, Japan’s interpretation of Korea-related issues would likely to be based on sources and references from the Japanese academia far from the Korea’s native stance.

A question like, “What is the origin of Korean war?” involves multiple disputes and arguments. One predominant analysis on the Korean War relies on North Korea’s accusation of the United States. The reasoning is that the U.S. invaded North Korea. One research after another uses the circular reasoning based on the similar analysis. Such analysis cannot be deemed as a true interpretation. North Korea invaded South Korea on May 1950. After the collapse of the Cold War, official documents of Soviet Russia disclosed facts that North Korea crossed over the 38 parallel which was a geographical division between South and North Korea. There are false interpretations regarding Korean issues. This article analyses such false facts and argue against self-referenced theories. This article aims to clarify the truth implementing theories of international relations.

The Korea Study have been referred to “regional studies”, which includes themes related to history, culture, religion, philosophy. This article uses mainly the constructive theory from the international theories.

Korea: the Politics of the Vortex written by Gregory Henderson, a former Professor at Harvard University, is one of the classics in Korean Studies. Henderson addresses the notion of vortex society and politics in the Korean peninsula. Henderson characterizes the Korean political system and culture as a centralized governance for nearly 2000 years. This article analyzes illusory interpretation and facts of South and North Korea. The ultimate objective of this article is to seek and confirm the truth.

1. 朝鮮半島と学術理論

1.1 朝鮮問題に学術理論はあるか

この論考は、国際政治としての朝鮮問題の学術理論を扱う。日本のアジア研究は、「地域研究」の概念が先行し、歴史や文化、政治制度などの分析は多いが、国際政治や国際関係論からの理論的接近は少ない。

この論述は、朝鮮問題を国際関係理論から解明する。国際政治学の理論は、第一次世界大戦後に①現実主義理論(リアリズム)¹と②国際協調主義(リベラリズム、理想主義?)²が生まれた。国際協調主義理論は、第一次大戦後に「もう戦争は起きない」との理論を展開したが、第二次大戦の勃発で崩壊した。戦後は③新現実主義理論³と④新国際協調主義(新理想主義?)⁴が、修正理論として展開された。最近では「構成主義理論」⁵も生まれている。

国際政治における古典的な現実主義理論は「勢力均衡(バランス・オブ・パワー)理論」⁶である。大国同士の勢力が均衡すれば、戦争は起きないとの理論だ。この理論が効果をあげた一つのケースは、米ソ冷戦時代の核戦争抑止の「相互確証破壊(MAD)」⁷戦略理論だ。米ソ両国が、相手を殲滅できるほどの核戦力を保持すれば、互いに核攻撃できないとの政策だ。

米ソの冷戦時代には、核戦争を防止するために、「信頼醸成」⁸や「軍備管理」⁹などの現実的な理論と政策が展開された。また「民主主義国家同士は戦争しない」¹⁰との理論も生まれた。

グレゴリー・ヘンダーソン博士¹¹は、著書の「朝鮮の政治社会」¹²で朝鮮半島の国内政治権力が首都に渦巻のように集中する現象を「渦巻型構造」¹³と説明した。また重村は、北朝鮮の大国外交を「振り子外交」¹⁴と説明した。

1.2 幻想の帝国

アジアのナショナリズムの起源を説明する名著に、「想像の共同体」¹⁵がある。ベネディクト・アンダーソン¹⁶の著作だ。吉本隆明は、教条的なマルクス主義を批判し「共同幻想論」¹⁷を書いた。フランスの哲学者ロラン・バルト¹⁸は、日本社会を「表徴の帝国」¹⁹と表現する名著を残した。

1 ジョセフ・ナイ『国際紛争』、有斐閣、2017、pp6、82、83

2 ナイ前掲書、pp6、82、84「国際協調主義」との訳には異論があるが、翻訳本に従った。

3 ナイ前掲書、pp9、83

4 ナイ前掲書、pp9、83

5 ナイ前掲書、pp82、84、91

6 ナイ前掲書、pp20、107-120

7 Mutual Assured Destruction

8 Arms Control. 米ソが核戦争を防止するために考え出した手法。

9 Confidence Building Measures、通称 CBM と呼ばれる。偶発的な軍事衝突を防ぐ努力。

10 カントやトーマス・ペイン、トクビルなどの言説から米国の国際政治学者らが主張。

11 米国の外交官、ハーバード大教授。朝鮮王朝の社会を「渦巻理論」で分析。

12 グレゴリー・ヘンダーソン「朝鮮の政治社会」、サイマル出版会、1997

13 朝鮮半島の権力構造が、首都一局集中である政治を渦巻構造で説明。

14 重村智計『北朝鮮の外交戦略』、講談社現代新書、2000

15 ベネディクト・アンダーソン『増補想像の共同体』、NTT 出版、1997

16 国際政治学者、コーネル大学名誉教授、インドネシア研究、2015 年死去。

17 吉本隆明『共同幻想論』、角川文庫、1982

18 フランスの哲学者、記号論で知られる。日本論の「表徴の帝国」が欧米で広く読まれた。

19 ロラン・バルト『表徴の帝国』、ちくま学芸文庫、1996

これら名著のタイトルとアイディアを借りると、韓国と北朝鮮、そして日本の国際関係は「幻想の帝国」の言葉で規定できる。

「幻想」は、英語では「ファンタジー (fantasy)」や「イリュージョン(illusion)」「ドリーム(dream)」などと訳される。「ファンタジー」だと、ディズニー映画のようで夢がありそうな語感だ。「イリュージョン」は、魔術を思い浮かべる。「ドリーム」だと、前向きの夢を描くのではないか。

また「illusory(イリュースリー)」の言葉の方が、適訳かもしれない。「錯覚を起こさせる」や「人を惑わす」の意義があり、「非現実的な」という表現にも使われる。

この論考では、韓国と北朝鮮、日本にあふれる「朝鮮半島を巡る幻想」を解明するために、韓国、北朝鮮と日本での言説を扱う他、韓国と日本の高校歴史教科書を、その素材として提示する。

1.3 ヒストリシズム

「ヒストリシズム (historicism)」は、歴史認識の理論である。「歴史法則主義」と訳される。

ヒストリシズムは、「二項対立」の理論に基づく歴史神話の構成である。二項対立の理論は、韓国で「両極化社会」の理論として知られる。日本人と植民地支配は「悪」で、被害者の朝鮮人を「正義」とする「運動論」である。戦前も矢内原忠雄教授²⁰のように良心的で、韓国人を弁護し助けた日本人もいたとの「中間理論」は、完全に否定される。

二項対立理論は、機能主義の思想である。「支配者」と「被支配者」に単純分解する。支配者は「悪」との単純な機能を強調する。被支配者は良心的、との神話が語られる。それに対し、クリティカル・シンキング²¹は、そうした二項対立の単純な思考と分析を「神話の創造」と否定し、「真実」を求める。韓国のクリスチャン・アカデミー²²は、70年代にこうした「両極化社会」と「両極化思考」を批判する研究を行った。

韓国では日本帝国主義が、全土の40%もの土地を収奪したと、誰もが思っている。これは、神話化された歴史だ。韓国の経済史学者の一人が、多くの証拠を調査し、朝鮮総督府などが収用した土地は全土の3%程度のうえ、日本人は正当な価格で売買したと明らかにした。韓国民はこの主張に納得しない。

日本でも、ヒストリシズムは横行している。「北朝鮮は戦争を起こす」「北朝鮮はすぐに崩壊する」との予測が根拠もなしに語られたが、実現しなかった。

日韓の歴史論争は、韓国側が神話的な「ヒストリシズム」を主張し、日本側は歴史の事実を主張する「クリティカル・セオリー」を強調している、とされる。慰安婦問題や竹島問題では、神話的事実と歴史的事実が衝突する。

日本は戦前「元寇を神風で打ち負かした」「大東亜共栄圏」などの神話を語り「ヒストリシズム」を広げ、太平洋戦争に突き進んだ。韓国は、栄光の歴史を語るために「ヒストリシズム」が支配し、「支配する方も問題だが、支配された韓国にも問題はあった」(全斗煥

20 元東大総長、1937年に「国家の理想」を書き、東大を追われた。無教会キリスト教の指導者

21 批判的思考と訳すが適切ではない。適切な日本語訳がない。わかったふりをしない思考。

22 キリスト教信仰を有する学者、神学者らの団体。韓国では大きな影響力を持つ。

大統領演説) との「クリティカル・セオリー」は、必ずしも根付いていない。

2. 「幻想の帝国」としての北朝鮮

2.1. 地上の楽園「幻想」

北朝鮮は、自らを「地上の楽園」と主張してきた。地上の楽園「幻想」は、日本のメディアや研究者に、北朝鮮を「地上の楽園」として紹介するように求めた。しかし、1980年代末ごろからこうした「幻想」に対する失望と疑問が生まれ、地上の楽園「幻想」は消滅した。

2.2 朝鮮戦争「幻想」と学者の責任

北朝鮮は、今もなお「朝鮮戦争は、米国が始めた」と主張している。しかし、冷戦崩壊後に旧ソ連の公文書が公表され、北朝鮮が始めた事実が明らかにされた。

朝鮮戦争は、北朝鮮の金日成首相(当時)が実行した戦争であった。その事実は、冷戦崩壊後にロシアの公文書館に残された文書で、確認された。それまでは、朝鮮戦争の原因と責任をめぐり、「内戦説」から「誘因説」など、さまざまな論争が行われた。

日本では、多くの研究者や学者が「朝鮮戦争はアメリカが起こした」「日本の植民地支配に原因がある」などと主張した。朝鮮戦争は米国と韓国が始めた、との主張が学界や知識人の間で、stereotypeなparadigmとして、日本では一時期広く定着していた。

アメリカのBruce Cumings教授²³は、著書の*The Origin of Korean War*で、戦争は38度線周辺で続いていた大小の戦闘が大規模な戦争に発展した、との見解を展開した。カミングス教授の主張は、韓国や日本の左翼・革新系学者から多くの支持を得た。それは、この説に従えば北朝鮮の責任を回避できるからである。日本で、当初から「北朝鮮の南侵」を主張したのは、神谷不二教授と信夫清三郎教授の二人だけであった²⁴。

しかし、カミングス教授らの「内戦拡大説」は、冷戦終結によるロシアの公文書公開で、否定された。

この理論は、一般には「修正説」といわれる。「修正説」は、北朝鮮の南侵説を否定するのが難しくなったため、展開された分析だ。朝鮮戦争を内戦として、内戦に介入した国連とアメリカを非難した²⁵。

金学俊教授は、小此木政夫教授や桜井浩教授、永井陽之助教授らを、「修正主義」に分類する²⁶。これらの学者は、「韓国と北朝鮮の国内冷戦に、北朝鮮がソ連と共謀して朝鮮戦争を引き起こした」と分析した。あるいは「朝鮮戦争は、北朝鮮が民族解放戦争として始めたが、米中の介入で、国際戦争に変化した」との理論を、示した。

ロシアの公文書館で、北朝鮮の金日成主席が朝鮮戦争の開始をソ連に開戦の一年以上も前から強く求めていた、との公文書が発見され、「修正主義」は敗北した。

23 Bruce Cumings *The Origin of The Korean War* Princeton University Press, 1981

24 金学俊『朝鮮戦争』 論創社、2007、pp87、88

25 金学俊前掲書、p112

26 金学俊前掲書、pp88、89、116、117

2.3 日本の歴史教科書の「日朝共同幻想」²⁷

日本の学界を支配した北朝鮮を何らかの形で擁護しようとした研究と主張は、敗北した。ところが、日本の教科書の記述には、北朝鮮責任説を回避させようとの意図を含む記述が、なお残っている。

朝鮮戦争の原因について、山川出版の「日本史B」は、次のように表現する。

「中国革命の成功に触発された北朝鮮が、武力統一を目指して38度線を越えて韓国に侵攻し、朝鮮戦争が始まった。北朝鮮軍は、ソウルを占拠し南朝鮮を席卷した。アメリカ軍が国連軍として介入した結果」

北朝鮮が、「中国革命の成功に触発された」との記述は、間違いだ。朝鮮戦争の起源についての研究で、「中国革命の成功に触発された」との解釈は、確認されていないばかりか多数説でもない。

また、「南朝鮮」との表記は、明らかにneocolonialismである。「韓国」と訂正すべきだ。「国連軍として介入した」との表現も適切でない。「介入」という記述ぶりには、「不当である」との意向が込められている。アメリカ軍が国連軍として介入したのではなく、国連安保理の決議で北朝鮮の南侵を「侵略」と認定し、多国籍軍を「国連軍」として派遣したのである。

三省堂の「日本史B」は「南侵」の言葉を使わず、次のように記述しているが、問題だ。

「北朝鮮軍が北緯38度線を突破して、韓国を攻撃した。」この記述は、北朝鮮が「南侵」との表現を意図的に避けるため、「突破」との記述を使ったと思われる。

東京書籍の「新選日本史B」も問題である。次のように記述している。

「その境界である北緯38度線付近で、紛争を繰り返していた。1950年6月、北朝鮮の軍隊が38度線を越えて、朝鮮戦争が勃発した」

「紛争」の記述は、軍事的な衝突や軍部隊の行動を想起させる。だが、当時の現実は紛争というよりも、撃ち合いや小競り合い、38度線を越えて南に逃げようとした人々への発砲であった。

北朝鮮の南侵は、小競り合いやいわゆる「紛争」とは関係なく、当初から南侵を意図した戦争計画であった。

東京書籍の「日本史B」も、次のように記述している。

「1950年6月、北朝鮮軍が38度線を突破して韓国に進攻し、朝鮮戦争が始まった。国際連合安全保障理事会は、ソ連欠席のまま北朝鮮を侵略者であると認定し、在日アメリカ軍を中心とする国連軍が派遣された」

この記述の「韓国に進攻」は「侵攻」と訂正されるべきである。

実教出版の「高校日本史B新訂版」は、朝鮮戦争について次のように記述している。北朝鮮責任論への言及を回避しようとする、かなり巧みな記述だ。

「1950年5月の総選挙で惨敗した韓国の李承晩政権は、国内危機をのりきるため、北進

27 日本の高校日本史教科書は2009年版を参照した。当時の教科書執筆者の空気が反映されている。教科書は検定を受け、原則四年に一度改定される。批判を反映し2019年版では記述が変わり「共和国」（北朝鮮を意味）などの「親北朝鮮」的表現は消えた。

統一を唱えた。また、北朝鮮も武力による南部の統一をすすめようとした。1950年6月25日、北朝鮮軍は南へ急進撃し、朝鮮戦争がはじまった。」

李承晩は、総選挙の敗北後に「北進統一論」を主張したのではなく、それ以前から「昼食を平壤で食べ、夕食はソウルをとるようになる」などの表現で、「北進統一論」を叫んだのは、事実である。

だが、これはアメリカから援助を引き出すための「政治的発言」であった、というのが韓国の政治学界の通説である。当時の韓国軍には、戦車も戦闘機もなく、「北進統一」できるとは、李承晩本人も考えていなかった²⁸。

世界史では、山川出版社の「詳説世界史」の記述は問題である。朝鮮戦争について、次のように記述している。

「国連安全保障理事会は、共和国軍の行動を侵略と認め、韓国支援のためアメリカ軍を主体とする国連軍を派遣した。国連軍が共和国軍に反撃し、中国国境近くまで追撃すると、中国は共和国側を支援して人民義勇軍を派遣した。」

この記述のなかで、「共和国軍」「共和国」との表記は削除し、「北朝鮮軍」とすべきだ。北朝鮮とそれを支持する勢力や、日本の一部研究者は、北朝鮮を「共和国」や「朝鮮」と記述させようと働きかけてきた。しかし、日本の新聞や一般書籍の表現は、あくまでも「北朝鮮」である。

2.4 日本人拉致の「幻想」

北朝鮮は長い間「日本人を拉致していない」との「幻想」を主張していた。この主張を受け、日本の新聞は「北朝鮮の日本人拉致」と断定的に表現できなかった。代わりに「北朝鮮によるといわれる日本人拉致事件」と表現した。北朝鮮による「幻想」を、日本のメディアも受け入れたと言わざるを得ない。

北朝鮮の金正日総書記は、2002年の日朝首脳会談で初めて「日本人拉致」を認めた。しかし「五人生存、八人死亡」との「幻想」を主張し、横田めぐみさんらの生存を否定した。しかし、その後の証言や調査では、この時期になお横田さんは生存していた事実が確認されている。

3. 歴史理解の「幻想」

3.1. 教科書「書き換え」の「幻想」

日本の歴史教科書が、外交問題化したのは1982年6月26日であった。文部省の教科書検定で、世界史の記述で日華事変を「華北に侵略」とした原稿が「華北に進出」と書き換えられた、と報道された。ところが、報道された教科書に関する限り、「書き換え」はなかった。「幻想」が生んだ、喜劇であった。

教科書「書き換え」の「大誤報」は、アメリカの著名なジャーナリスト、Walter Lippmann が著書の *Public Opinion* で1922年に書いた「stereotype 理論」²⁹を証明する「事件」であった。Walter Lippmann は、国際紛争の原因として、報道が生み出す stereotype な誤っ

28 金学俊前掲書、pp85、86

29 Walter Lippmann *Public Opinion* Free Press N.Y., 1997

た理解を指摘した。そして、誤った **stereotype** を正すのがジャーナリストの使命であると説いた。

なぜ、「誤報」は起きたのか。検定に合格した教科書は、事前に文部省の記者クラブに、一部ずつ届けられる。記者クラブでは所属の各社記者が分担して、検討・取材し、記事を書いていた。

その中で、テレビ局の記者が、実教出版の「世界史」について、「侵略が進出に書き換えられた」と、記者クラブの各社に報告した。この記者は教科書の原稿本を手に入れ比較せずに、学者の主張を確認せず報告してしまった。82年6月の検定では「書き換え」の事実ではなかったのである。

3.2 韓国「不存在」の幻想

岩波書店の雑誌「世界」は、1984年10月号まで、韓国と表記させず「南朝鮮」の表記を続けた。「南朝鮮」の表現は、大韓民国は存在しないとの意味であり、文字通りの「幻想」である。北朝鮮は今なお公式には、大韓民国の存在を認めていない。岩波書店は、北朝鮮の方針に従ったのだ。

日本共産党の機関紙「赤旗」や雑誌「前衛」でさえ、「南朝鮮」の表記を1997年3月号で止めたのに、岩波書店だけがそれから7年以上も継続したのである。

日本の左翼・革新勢力の研究者らは、長い間北朝鮮を「朝鮮」「共和国」と表記してきた。その影響か、山川出版の世界史は北朝鮮を「共和国」と、今なお記述している³⁰。

一方韓国では、1990年代初めに「日本はない³¹」という書籍が超ベストセラーになった。韓国KBSテレビの東京特派員が書いた本だ。「日本不在」のテキストが韓国人の心に響いた。

韓国の国史と世界史の教科書には、現代日本の記述はほとんどない。特に、戦後日本が変わった、というテキストはない。また、その象徴である平和憲法と憲法九条についてのテキストもない。

この「不存在」の言説と「幻想」の相互認識は、日韓の社会に互いに存在した意識である。その「幻想」を「日本（韓国）はある」「日本（韓国）は変化した」と、変えることは可能なのか。

これは、双方の社会における **stereotype**³²な「幻想」と **final vocabulary**³³克服の課題だ。日韓の **paradigm shift**³⁴の問題でもある。また、日韓双方に存在する **Orientalism**³⁵の問題でもある。

30 『世界史』山川出版社、2007 p345

31 鄭麗玉『悲しい日本人』たま出版、1994

32 Walter Lippmann *Public Opinion* Free Press N.Y., 1997

33 Richard Rorty *Contingency, Irony, and Solidarity* Cambridge Univ. Press, 1989

34 Thomas S. Kuhn *The Structure of Science Revolution* The University of Chicago Press, 1996

35 Edward W. Said *Orientalism* Vintage Book, New York, 1978

3.3 「幻想」としての neocolonialism

幣原担 (Shidehara, Taira³⁶) は、日本人初の学政参与官として、日韓併合前の 1907 年に大韓帝国に派遣された。その時の思いを、次のように述べている³⁷。

「私は、文部省から朝鮮の学政参与官への就任を打診された時、とても真剣に考えた。これは、なんという因縁だろう。今や、日本が数千年にわたり恩恵を受けた文化への恩返しができる。したがって、私は自分の人生を賭けて、雪の降る月に冬の寒さもいとわず、韓国に渡ったのである」

この言葉からは、本人はきわめて真面目で誠実な人物であることが、うかがえる。日本人からみると、韓国への、暖かい思いやりが伝わってくる。

だが、この言葉には彼を待ち受ける韓国人の思いは、理解されていない。当時の日本人としては良心的だが、いわゆる **modernism** の押しつけである。自らの人生観と世界観に、対象を合わせる考え方である。典型的な **colonialism** の発想といわざるをえない。

この幣原の考えは、戦後の日本の知識人や文化人、韓国に関わる日本の知識人に共通した「日本的 **Orientalism**」であった。簡単に言えば、韓国や北朝鮮のような小さな国の政治や外交、経済を自分が動かしているとの「**power**」意識である。この意識は、「日本的 **Orientalism**」に共通する。

戦後の日本では、**colonialism** を清算し反省する **post-colonialism** は生まれなかった。日本で、朝鮮史の研究に従事したのは、結果として日本の植民地支配に貢献した人々であった。歴史研究者の中からは、「朝鮮植民地反対」「植民地を放棄せよ」との主張は、出なかった。

日本による植民地化や植民政策に反対したのは、歴史学者たちではなく、経済学者の矢内原忠雄や石橋湛山など、わずかであった。戦後の日本の朝鮮半島に関する研究は、**colonialism** の否定と清算、さらには **post-colonialism** としては出発しなかった。むしろ、韓国人と朝鮮人への根深い **colonialism** を内包した「**neocolonialism**」意識を拡大した。

この **colonialism** 意識を隠すために、研究者たちは北朝鮮を礼賛した。北朝鮮の社会主義とその指導者をたたえる事で、自分は **colonialist** ではなく、朝鮮人への差別意識がない事を強調した。その一方で、韓国と韓国人、その指導者に激しい憎悪の感情や差別意識を、あらわにした。これが、戦後日本における **neocolonialism** の構図である。

戦後の日本では、相当の期間朝鮮史学者をはじめ、朝鮮問題で発言した知識人、言論人は韓国語を使えなかった。韓国語を使える特派員を、新聞社が初めて送り出したのは、1976 年であった。彼等には、「日本語でも朝鮮問題はできる」との驕りがあった。これこそは、「**power**」意識からする日本的 **Orientalism** である。韓国や北朝鮮は、日本語だけでわかるとの優越意識だ。

北朝鮮を支持する研究者や言論人たちは、韓国という記述を使わず「南朝鮮」と表現した。これは、韓国「不存在論」である。韓国は、主権国家ではなく「米帝国主義の傀儡」とみられ、「南朝鮮」と記述された。北朝鮮については「朝鮮民主主義人民共和国」「共和国」「朝鮮」という表現を、使用した。

36 (1870-1953) 明治から昭和の教育行政官、大韓帝国学部学政参事官、東大教授を経て台北帝国大学総長、首相の幣原喜重郎は、次弟。

37 Christine Maji Rhee *Doomed Empire* Ashgate, Hampshire, U.K., 1998

一方、韓国・朝鮮人の中には、「韓国否定」の日本人の colonialism 心理を利用し、日本の「権力」や権威を利用しようとした人たちがいた。だから、日本で colonialism が根強く生き残った責任の半分は、韓国と北朝鮮、あるいは朝鮮総連と在日朝鮮人、韓国大使館と在日韓国人、韓国の反体制学者・知識人たちにもある、と指摘せざるをえない。

戦後、1980 年末頃まで朝鮮総連は、日本の研究者やジャーナリストに、強大な影響力を持っていた。朝鮮総連は、韓国を「独裁」「非民主国家」「遅れた国」として書くように、働きかけた。これは、日本人の心の底にある差別や蔑視としての colonialism を、韓国にだけ向けさせる運動であった。日本の知識人や言論人の多くが、この圧力に屈した。岩波書店の雑誌「世界」が、こうした運動に協力した。「世界」では、1984 年 10 月号まで、「南朝鮮」の表記が残った。

また、日本における「権力」や「権威」と一体化しようとする、韓国的な neocolonialism も存在した。かつて植民地時代には、韓国人が朝鮮総督府や支配層へ協力する「権力との一体化」としての colonialism があった。韓国の知識人や「亡命知識人」が、日本で韓国を激しく非難し、朴正熙を攻撃する論陣を張った。それは、独裁を打倒し民主化のためには必要であった、かもしれない。それなら、どうして北朝鮮の独裁と民主化には、口をつぐんだのか。北朝鮮の民主化や強制収容所、指導者の独裁にはまったく言及しなかった。これは北朝鮮の「権力」に協力した、北朝鮮従属の Orientalism であった。北朝鮮従属の Orientalism は韓国への優越意識を強調し、北朝鮮の正統性、経済的成功、立派な指導者の存在を宣伝していた。

ともかく、日本人の colonialism 意識を韓国にだけ向ける neocolonialism 運動に韓国知識人が協力した。

3.4 「幻想」としての日韓 Orientalism

Orientalism は、周知のようにアメリカの Edward W. Said 教授が生み出した理論である。1978 年に出版された著書「*Orientalism*」³⁸が、欧米の学会と社会に衝撃を与えた。

「Orientalism」は、イスラムに対する欧米の理解が、西洋中心の差別と power の意識から脱皮できない事実を、指摘した。この理論は、日本における韓国や北朝鮮に対する理解に、応用できる。

欧米では、中東やアジアなど非西洋国家の歴史と文化への理解が、欠如していた。その認識の矛盾を、Said は「Orientalism」として、鋭くえぐり出した。日本と朝鮮半島の関係では、いわゆる「脱亜論」³⁹が、日本的 Orientalism の原型になろう。

フランスや英国の文学は、The Orient を神秘的な存在として描いた。東洋という概念を西洋の客体としてしか理解しなかったためだ、と Said はいう。つまり、西洋に支配される東洋。西洋が近代化してあげる東洋、という認識であった。そこには、東洋の主体性と独立への敬意は存在しなかった。Said は、西洋の学問研究が東洋を主体として受け入れない現実を厳しくえぐりだし、批判した。

同じように、日本は韓国や朝鮮という概念を、客体としてしか見なかった。言い換える

38 Edward W. Said *Orientalism* Vintage Book, New York, 1978

39 福沢諭吉の「脱亜論」には、日本人にとってはそれなりの意味と傾聴すべき論理ではあるが、それを悪用され朝鮮蔑視論に利用されたのが問題である。

と、日本に支配された朝鮮半島、日本が近代化してあげる韓国と北朝鮮という意識である。戦後は、韓国を独立国として見ないことが、左翼の運動になった。日本の左翼ほど、韓国に対する **Orientalism** を露骨に叫んだ人々はいなかった。「韓国不存在論」の展開である。

東郷実 (Togo, Minoru) ⁴⁰は、今では誰も知らないが、戦前は著名な政治家で植民研究者でもあった。彼の「植民政策と民族心理」(1925)は、岩波書店から出版され当時のベストセラーであったという⁴¹。東郷は、日本人のような「優れた民族」がいる一方で、colonyの「下等な民族」がいる、と主張した。彼は、colonyの日本への「同化」を否定し「分化政策」を主張した。Colonyの伝統や民族性の尊重には言及したが、独立や自治権の付与には反対だった。

日本人を「優秀な民族」とみて、韓国人や朝鮮人を「下等な民族」とする考えは、日本社会になお根強く残っている。このcolonialismを、北朝鮮と日本の左翼(革新)勢力が利用した。

だから、金大中拉致事件後の日本では「韓国は恐ろしい国」「韓国人はおそろしい人たち」「韓国経済は破綻した」といった言説が、定着した。ところが、2002年に北朝鮮が日本人拉致を認めると、テレビや新聞は連日北朝鮮の否定的な面を、報道した。これに対し、一部では「北朝鮮バッシング」との批判が起きた。

戦後の日本では、韓国人と朝鮮人が、北朝鮮と韓国を、それぞれ口汚くののしり合った。韓国の知識人なのに、韓国と指導者を、日本人に悪く言い続ける人たちもいた。日本人のcolonialism意識を、煽動したのである。これが、韓国的neocolonialismである。彼らは、決して北朝鮮を批判しなかった。

韓国を否定し、北朝鮮だけを評価させようとしたneocolonialismが、2002年以降は北朝鮮に向かったのである。彼等が増幅させた「韓国蔑視」が、北朝鮮に向かったのである。Neocolonialismの逆襲である。

韓国国民大学の韓相一教授は、『(日本の)知識人の傲慢と偏見——「世界」と韓半島』(2008) ⁴²で、この日本的**Orientalism**を、厳しく指摘し批判した。韓相一教授は、この著書で、雑誌「世界」の創刊号からの朝鮮問題に関する記述と言説を詳細に分析した。この著作は、日本の進歩的文化人たちの韓国への差別意識をえぐりだした韓国版「**Orientalism**」として、高く評価されるべき労作である。

韓相一教授によると、「世界」が戦後最初に掲載した韓国関係の論文は、日本の植民地支配を正当化する論文であった。韓相一教授は、「世界」は「反韓親北」路線を一貫して維持した、と指摘する。「世界」が1973年5月から88年3月まで、15年にもわたり掲載した「韓国からの通信」は、日本における韓国否定のイメージを決定的にした。筆者は、「TK生」と表記された。

後に、韓国の池明観教授が「自分がTK生である」と名乗りをあげたが、日本の専門家の間ではなお「池明観教授だけではない」と、疑問視されている。彼は、東京で書いていたことを、認めたのだった。

40 東郷実 (1881-1959) 台湾総督府に勤め、その後政治家に。農政通として知られた。文部政務次官を勤めた。

41 Christine Maji Rhee *Doomed Empire* Ashgate, Hampshire, U.K., 1998

42 韓相一『知識人の傲慢と偏見——「世界」と韓半島』キパラン、ソウル、2008

「韓国からの通信」は、韓国から書簡が送られて来る体裁をとっていた。ところが、東京で書いていたというのだから、「韓国からの通信」ではなく「東京からの通信」である。ジャーナリズムの基本からすれば、ねつ造記である。

「韓国からの通信」は、北朝鮮の独裁や政治犯収容所、人権問題、民主化問題にはまったく言及しなかった。ただひたすら、韓国を批判し朴正熙を攻撃した。ということは、池明観教授の行動は韓国的なneocolonialismであり、北朝鮮従属のOrientalism(北朝鮮に協力するという意味)であったと指摘せざるをえない。日本という「power」と、「世界」という「権威」を借りて、ひたすら「反韓親北」⁴³宣伝に加担し続けたからだ。

韓国で長く牧師として活躍した日本人の、沢正彦⁴⁴さんは、早くから「韓国からの通信は韓国に住んでいる韓国人ではない」「韓国人への愛情も連帯も感じさせない」と指摘した。この言葉に沢牧師が込めた意味は、旧約聖書の預言者たちは王や為政者を激しく批判したが、かれらの言葉には同じ民族への愛情と連帯意識があったという、聖書解釈からの言葉である。それに比べ、キリスト者である池明観教授の文章に、同じ国民と為政者への連帯も愛情も感じられない、との指摘は決定的である。

韓相一教授は、雑誌「世界」を次のように批判した。

『世界』は、心から金日成を世界でも例のない全知全能の指導者と考えていたのか。本当にそう考えていたのなら、飢餓に耐えかね命をかけて北朝鮮を捨てる脱北難民が増えていく今日の現実を、どのように説明するのだろうか。

また、『世界』は、朴正熙が本当に理性も国家感もなく、ただ権力だけを追求した暴君のような存在と確信していたのか。もし、確信していたのなら、今日の経済成長と歴代大統領の中で、最も能力があり国政遂行を効果的に行った大統領として、誰よりも朴正熙を高く評価する現実をどのように説明するつもりか⁴⁵

韓相一教授は、「世界」が抱いたneocolonialismと日本的Orientalismを、次のように明確に概念規定し、激しく批判した。

「心の底にある優越意識から人権と良心を口実に、北をさらに支援し、民主化の名のもとに、韓国を非難する方向に向かった。このため、和解からさらに遠ざかることになった」⁴⁶

韓相一教授が指摘する日本的Orientalismの背後にあった思想状況について、中央公論誌の元編集長として、日本の論壇で大きな影響力を持った粕谷一希は、次のように説明している⁴⁷。

「南原繁東大総長を中心とした東大アカデミズム、あるいは岩波書店によって形成された平和問題懇談会、あるいは笠信太郎と朝日新聞を中心として主張された全面講和の理論は、理想主義的色彩が強かった。

けれども、むしろそうしたシンボリックな主張の陰で、下部構造を握り、実際政治工作に動いた勢力は、社会党・共産党・労働組合・急進派知識人の、共産陣営（平和勢力と

43 韓相一前掲書

44 沢正彦『ソウルからの手紙』草風館、1984

45 韓相一『知識人の傲慢と偏見——「世界」と韓半島』キパラン、ソウル、2008、p341

46 韓相一『知識人の傲慢と偏見——「世界」と韓半島』キパラン、ソウル、2008、p342 下線は筆者による。

47 粕谷一希『戦後思潮——知識人たちの肖像』藤原書店、2008、p165

規定された)と呼応した人民戦線理論であり、日本をアメリカ陣営から切り離し、中立化させることで、やがて社会主義革命への道を切り開こうとする“革命の理論”と区別することの難しい政治主体であった」

この粕谷元編集長の説明は、韓国に対する日本的 **Orientalism** の起源を十分に説明している。日本の知識人やアカデミズムを支配した「理想的平和主義」が、北朝鮮を平和勢力と規定し、韓国を米帝国主義勢力とみたことから始まる。また、左翼勢力の「人民戦線理論」が、北朝鮮の「統一戦線工作」と連動したからであった。

4. Stereotype、Paradigm、Final Vocabulary

4.1 「幻想」としての日韓 Stereotype

韓相一教授が指摘した問題は、stereotype⁴⁸な韓国理解と、その弊害と説明できる。韓国では、「反省しない日本人」との考えが、一般的だ。「日本人の歴史歪曲」との主張も、支配的だ。日本人も、「韓国人はいくら謝っても許さない」との stereotype な考えを、有している。また、「北朝鮮が日本を攻めて来る」との stereotype 思考もある。

4.2 日韓の Paradigm と Paradigm Shift

Stereotype 理論をさらに発展させ、paradigm 理論を創造したのが、Tomas S. Kuhn⁴⁹教授であった。彼は世界的な科学史の研究者である。人類は、天動説から地動説に、どのように考えを変えたのかを研究し、Paradigm Shift という言葉を創造した。

かつて、人々は太陽が地球の周りを回っている、と信じていた。この状態を、paradigm という。ある時代の一つの社会や集団が共有している、同じ考えや認識、概念をparadigm と名づけた。Kuhnは、天動説を突き詰め、いくら探求しても理解不可能に陥る時にparadigmが変わると説明した。彼は、この状態を「Incommensurability (通訳できない見解)」と呼んだ。そして、paradigmが変わる事によって、歴史が変わった。このparadigmの変化を、彼はParadigm Shiftと呼んだ。

日本人が韓国に抱く paradigm と、韓国人が日本人に抱く paradigm は、まったく異なる。日韓両国が、相互に信頼できる友好な関係を築くには、paradigm shift が必要だ。

4.3 Final Vocabulary

Final Vocabulary (最終語彙) は、アメリカの世界的哲学者、Richard Rorty 教授⁵⁰が創造した理論である。Final Vocabulary とは、ある言葉の意味や価値に対して、誰も反対できず疑問も示す事ができない言葉である。Rorty 教授は、この Final Vocabulary を打ち破ることが、歴史を変えると述べ、それを実行する人物を Ironist と呼び、その役割を強調した。

この理論は、stereotypeな考えの変更やparadigm shift理論を、さらに発展させた理論である。Final Vocabularyは、その語彙を使用されると、誰も反対できず納得せざるをえない「最終的な言葉」ということから、「最終語彙」と呼ぶ。

48 Walter Lippmann *Public Opinion* Free Press N.Y., 1997

49 Thomas S. Kuhn *The Structure of Scientific Revolution* University of Chicago Press, 1962

50 Richard Rorty *Contingency, Irony, And Solidarity* Cambridge university press, 1989

Rorty教授によると、最終語彙は言葉で説明できる限界を意味する。

日韓の間には、多くのFinal Vocabularyがある。韓国では「日帝」や「独島」「親日」は、別の解釈を許さない、Final Vocabularyである。一方、日本の場合は、「原爆」や「北方領土」「天皇」となる。

このFinal Vocabularyが打破されると歴史が代わり、社会が変わる。Rorty教授は、Final Vocabularyを打破する人物をLiberal Ironistと呼んだ。

4.4 Nationalism と Identity, National Trauma

どんな国民や民族にも、national traumaと呼ぶべき民族的かつ歴史的な記憶がある。

韓国のGandhiと呼ばれた宗教家の咸錫憲は、韓国のnational traumaを「苦難の民族」と表現し、著書の「意味としての韓国史」で次のように述べた⁵¹。

「われわれは苦勞するためにこの世に生まれてきたようなものだ。三国時代以降は一寸の領土も広げた事はなく、奪われるばかりだ。……他民族には、二百年、三百年の平和な時代があるのに、われわれにはせいぜい百年、それも完全にではない。……韓民族も、敗残民族という汚れた哀れな名前を残したくないならば、今からでも世界的使命に目覚めなければならない」

咸錫憲は、植民地時代に投獄された経験を有するキリスト教徒であったが、熱狂的な民族主義者ではない。それでも、この文章には民族と国家にたいするnationalismの思いが、溢れている。

一般的には、独立後の韓国での「国民国家」形成過程では、「反日」と「反共」がnational identityであった。あるいは、「反日nationalism」「反共nationalism」とも表現できよう。

Nationalism とは何か、神戸大学の木村幹教授は次のように定義する。

「人々が「共通の親近感」に基づいて「自らの国家」を持とうとする願い」⁵²。

日本により国家を失い、また朝鮮戦争で国家を失いかけた経験から、韓国人が国家建設への強いnationalismを抱くのは当然であった。韓国民にとって、「日本の植民地支配」はnational traumaである。韓国人は「日帝」「植民地」「拓殖」などの言葉を聞くと、反射的に反発し感情が興奮するだろう。「拓殖」の言葉は、「東洋拓殖会社」を意味する。韓国では「東洋拓殖会社」が、貧しい農民の土地を収奪した、と教えられている。これについて、ソウル大学の李榮勲教授が「収奪論」は事実とは異なる、との研究成果を発表した⁵³。

しかし、李榮勲教授の研究と発言は激しい非難を浴びた。韓国社会に広がるstereotypeな理解では、日本は常に「収奪した人々」であった。そのparadigmに挑戦した李榮勲教授は、paradigm shiftを試みFinal Vocabularyを変えようとした勇気ある「ironist」といえるだろう。

51 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』新教出版社、1993、pp359-370

52 木村幹『近代韓国のナショナリズム』ナカニシヤ出版、2009年、p221

53 李榮勲『大韓民国の物語』文芸春秋社、2009

5. 韓国の「歴史幻想」

5.1 日本の敗戦と日帝

高等学校の国史教科書（2007 年版、国史編集委員会、国定図書編纂委員会）は、日本の敗戦と韓国独立について、次のように記述している。

「1945年8月15日、我が民族は日帝の抑圧からはなたれ、光復を迎えた。これは、日本が連合軍に降伏し、同時に我が民族が国内外で力強い独立運動を展開した結果であった」⁵⁴

「日本の敗亡を確信し、新しい国家の建設を準備した大韓民国臨時政府は、普通選挙を通じた民主共和国の樹立を規定した大韓民国建国綱領を策定し、公布した」⁵⁵

これに対し、咸錫憲氏は次のように書いている⁵⁶。

「解放は、盗人のように不意に訪れたということだ。……君も僕も皆知らなかったのだ。みんな眠っていたのだ。神社参拝をしろと言われれば腰が折れんばかりに拝み、姓を改めろといわれると競いあって改めて……、この国が解放されるとあらかじめわかっていた人など一人もいないのだ」

「日帝」とは天皇か軍部か、あるいは朝鮮総督府か。それとも、官僚や新聞記者までも指すのか。韓国の高校国史教科書には、次の記述がある⁵⁷。

「日帝は、国権を強打奪した後、朝鮮教育令を作り植民地国民として守るべき義務を強調した」

この「日帝」は、「朝鮮総督府」と書いた方が具体的で概念が明確である。

「日帝」の中でも、早稲田大学卒業生の石橋湛山は、「朝鮮の独立」を説き、「朝鮮を放棄せよ」と、主張した。彼は、3・1独立運動後に「東洋経済新報」に朝鮮の独立を支持する、次の社説を書いた。

「朝鮮人は一つの民族である。彼等は彼等の特殊なる言語を持って居る。多年彼等の独立の歴史を持っている」

「朝鮮台湾樺太も捨てる覚悟をしろ、……大日本主義、すなわち日本本土以外に、領土もしくは勢力範囲を拡張せんとする政策が、経済上、軍事上価値なきこと」⁵⁸

こうした日本人まで、「日帝」の中に含まれるのか。韓国の教科書には、韓国のために「日帝」に反抗し、戦った日本人の記述はない。

「日帝」とは何かについて、アメリカの日本史研究の第一人者であるStanford大学のPeter Duus 教授は、著書の『*The Abacus And Sword*』で、次のように説明している。彼は「明治の帝国主義」と、その後の「軍国主義」を明確に区別している。

“I will argue that Meiji imperialism, and more specifically expansion into Korea, was the product of a chorus of domestic politicians, journalists, businessmen, and military leaders, with a subimperialist Japanese in Korea”⁵⁹

韓国の歴史教科書は、帝国主義者と一般国民、さらには抵抗した日本人、日韓併合に反

54 国定高校国史（教育人的資源省、2007 年）p123

55 国史前掲書

56 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』新教出版社、1993、p303、（このタイトルは、間違いだといわざるをえない。著者の意図を生かすなら『意味としての韓国史』とすべきである。

57 検定高校国史（2007 年版）p123

58 石橋湛山「東洋経済新報社説」1921 年 7 月 30 日、8 月 6 日、8 月 13 日

59 Peter Duss *The Abacus And Sword* University of California Press, 1995, pp23

対した日本人を区別しない。これは、韓国的な *neocolonialism* である。「日帝」という言葉を使えば、誰も文句を言えないし、概念も曖昧にできる。「日帝」の言葉は韓国における“Final Vocabulary”だ。

5.2 「幻想」の朝鮮戦争

朝鮮戦争に関する教科書記述は、韓国の教科書と日本の教科書では、記述ぶりがかなり異なる。第2章の第2節以下を参照してほしい。

高校国史では次のように記述されている。

「北韓はソ連の支援下に1950年6月25日未明に南侵を強行した。国連は、戦争に対し、安全保障理事会を招集し、北韓の南侵を侵略行為と規定した、さらに米国を中心に16カ国が国連軍として派遣された」⁶⁰

この教科書の記述からは金日成主席の民族への責任の指摘が、かなり弱められている。1998年版の高校国史は、強い表現で金日成主席の名前を明記し、責任を厳しく指定し、次のように記述していた。

「北韓の共産主義者たちはこの情勢を利用し、戦争準備をした。金日成は秘密裏にソ連を訪問し、南侵のためにソ連と中国から支援の約束を受け……」⁶¹

5.3 日韓基本条約

日韓基本条約については、高校国史は次のように簡単に記述しているに過ぎない。

「朴正熙政府は、祖国近代化実現を国政の重要目標と定め、経済開発政策を推進し、日本の謝罪と正当な補償を要求する市民、学生の激しい反対を抑圧して、韓日国交正常化した(1965)」⁶²

この記述は、日本からの経済協力資金が、韓国の経済発展に役立ったのかどうかについて、意図的に判断を避けている。

韓国近現代史(天才教育社、2007年)だけが、次のように記述している。

「日本から提供された請求権資金は韓国の経済発展過程で重要な役割を果たした⁶³」

これは、韓国の教科書の記述の中では、相当に勇気ある表現である。韓国における反日 *paradigm* 感情を修正し、Final Vocabularyを打ち破る、重要な記述である。

日本は、経済協力資金として無償3億ドル、有償2億ドル、民間借款3億ドル以上を供与した。当時の韓国の国家予算は、約3.5億ドルで日本の外貨準備高は、わずか18億ドルであった。これについて、高校近現代史(大韓教科書、2007年)は、次のように記述している。

「無償3億ドル、政府借款2億ドル、民間産業借款1億ドル以上を受ける条件で、韓日協定が締結されてしまった⁶⁴」

これは、あたかもこの金額は意味がないといった記述ぶりである。「締結された」という表現ならまだしも、「締結されてしまった」というテキストに極めて否定的な感情を込めよう

60 国定高校国史(教育人的資源省、2007年) p125

61 国定高校国史(教育省、1998年) p199

62 国定高校国史(教育人的資源省、2007年) p126

63 韓国近現代史(天材教育社、2007年) p296

64 韓国近現代史(大韓教科書社、2007年) p273

としている。

5.4 平和憲法についての記述なし

日本は、1946年に新憲法を公布した。明治憲法の天皇の統治権を廃止し、主権在民、平和主義、基本的人権を柱に、天皇については政治権力を持たない「象徴天皇制」になった。

韓国の教科書の記述では、「日帝」が滅亡した後、日本にどのような国が誕生したのかについて、明らかにしていないのである。日帝滅亡後の日本をイメージできる説明が、まったくないのである。

日本国憲法は、戦後の日本を理解するのには、絶対に必要な要素である。

5.5 金大中拉致事件も記述なし

金大中元大統領は、1973年8月8日、東京のホテル・グランドパレスから白昼拉致された。韓国の教科書と日本の教科書には、事件の記述がない。

金大中事件は、韓国での民主化運動を日本のメディアや日本国民が支持する大きなきっかけになった。また、日本人の「主権意識」を復活させるのに、大きく作用した。

5.6 天皇の「お言葉」と、村山談話、謝罪

韓国の教科書は、日本の謝罪と反省を問題にするが、反省と謝罪に関する天皇の「お言葉」と「村山談話」を、記述しない。日本政府の「反省」と「謝罪」については、次のような経過がある。

まず、1965年の韓国の李東元外相と椎名悦三郎外相との共同コミュニケで、日本の反省と謝罪が次のように表明された。

「椎名外務大臣は李外務部長官の発言に留意し、このような過去の関係は遺憾であって、深く反省していると述べた⁶⁵」

さらに、歴史教科書問題が起きた1982年8月には、宮沢喜一官房長官が「歴史教科書についての政府見解」として、次の「官房長官談話」を、発表した⁶⁶。

「韓国、中国等より、我が国教科書の記述について批判が寄せられている。我が国としては、批判に十分に耳を傾け、政府の責任において是正する。」

この宮沢談話での重要語句は「是正」という言葉である。是正」は、現代日本語の感覚では「必ず直さなければいけない」とのニュアンスは、かなり弱い韓国語では日本語より強い語感がある。

1984年に韓国大統領として公式に日本を初訪問した全斗煥大統領に、天皇が次のお言葉を述べた⁶⁷。

「両国は、深い隣人関係にあったのであります。このような間柄にも関わらず、今世紀の一時期において、両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならないと思います。」

65 日韓共同コミュニケ、1965年2月20日

66 「歴史教科書」に関する宮沢官房長官談話、1982年8月26日

67 天皇陛下あいさつ全文、朝日新聞 1984年9月7日朝刊

韓国の新聞は「日皇の遺憾の謝罪を受ける」（ソウル新聞）、「不幸な過去は“遺憾”の謝罪を受ける」（朝鮮日報）、「日皇、韓国植民統治を公式謝罪」（中央日報）と報じた⁶⁸。

盧泰愚大統領は、1998年10月に訪日した。平成天皇が盧泰愚大統領へのお言葉を、次のように踏み込んだ表現で述べた⁶⁹。

「昭和天皇が『今世紀の一時期において、両国の間に不幸な過去が存した事は誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならない』と述べられたことを思い起こします。我が国によってもたらされたこの不幸な時期に、貴国の人々が味わわれた苦しみを思い、私は痛惜の念を禁じえません。」

このお言葉で、天皇は「不幸な時期」が「我が国（日本）によってもたらされた」と日本の責任を明らかにした。

海部俊樹首相も、5月24日の首脳会談で次のように、「おわび」を述べた。

「謙虚に反省し、率直におわびの気持ちを申し述べたい。引き続き協議すべき点などはあるが、過去に起因する問題には一区切りをつけ、今後は新しい関係の構築に向けスタートしていきたい」⁷⁰

金大中大統領は98年10月の訪日で小渕恵三首相と、次の共同声明を発表した。

「小渕総理大臣は、我が国が過去の一時期韓国国民に対し植民地支配により多大の損害と苦痛を与えたという歴史的事実を謙虚に受けとめ、痛切な反省と心からのお詫びを述べた。⁷¹」

日本政府は、敗戦から50年目に当たる1995年8月15日に、村山富市首相の談話で過去の謝罪を明らかにした⁷²。

「『杖るは信に如（し）くは莫し』と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします⁷³」

村山富市首相は1995年10月17日に、国会参議院予算委員会で、日韓併合条約について「対等平等の立場で結ばれた条約とは、私は考えておりません。・・・厳しい反省の上に立って、そして誤るべきは謝って」と答弁した。

また同年11月に、金泳三大統領に覚え書きを送り、日韓併合条約を「大きな力の差を背景とする双方の不平等な関係の中で、民族の自決と尊厳を認めない帝国主義の条約」と、述べた。

6. 日本における現代韓国「幻想」

6.1 「幻想」としての独立と分断

日本の高校教科書における、朝鮮半島の植民地からの解放と、分断についての記述は、「幻想」である。日本のポツダム宣言受諾と無条件降伏により、植民地は解放され独立した。山川出版の日本史Bは次のように記述している。

68 朝日新聞 1984年9月7日朝刊

69 朝日新聞 1990年5月25日朝刊「天皇陛下のお言葉」、下線は筆者による。

70 朝日新聞 1990年5月25日朝刊

71 日韓共同宣言「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」外務省、1998年10月8日

72 日本史B、実教出版、2008年、pp385

73 村山富市首相談話「戦後50年の終戦記念日にあたって」外務省、1995年8月15日

「朝鮮でも独立への動きが高まったが、日本の降伏とともに、北緯38度線を境にして北はソ連軍、南はアメリカ軍によって分割占領され軍政が敷かれたため、統一的な独立を果たせなかった」

この記述には、問題がある。日本の植民地からの解放は、「独立」である。日本の教科書としては、「日本から独立した」と書いても、問題はないはずである。

6.2 朴正熙と金大中など指導者の記述

朴正熙は、日本の左翼や革新勢力（親北朝鮮）から、最も嫌われた指導者である。韓国で最も評価の高い大統領である。

韓国の指導者の名前については、日本の世界史教科書は、李承晩、朴正熙、全斗煥、盧泰愚、金大中などの名前を記述している。韓国の教科書が、日本の首相の名前をほとんど記述していないのとは、対照的である。ただ、朴正熙については民主化弾圧が強調され、経済発展の功績はほとんど記述されていない。

例えば、三省堂の「世界史B」は次のように記述する。

「韓国では、朴正熙大統領の下で、民主化運動を弾圧しながら、日本などの外国資本を導入して重工業を育成していった。1979年に朴正熙大統領が暗殺されると、民主化運動がもりあがったが、軍部の全斗煥らが、1980年に光州で軍隊に多数の市民を殺害させるなど、徹底した弾圧を行って政権を掌握した」

6.3 天皇のお言葉と村山談話、謝罪

日本の日本史教科書も、天皇のお言葉と「謝罪」についてまったく記述していない。また、村山談話についても、記述している教科書は極めて少ない。

終章 あらたな Paradigm への提言

日本の教科書は、金大中事件について記述せず、天皇や歴代首相、官房長官の反省とおわびについても、ほとんど触れていない。日本人自身が、反省とおわびに努力したという事実を知らない。

韓国の教科書も現代日本についての記述が、余りにも少ない。韓国の教科書は日本国憲法と戦後日本の変化を、説明しない。韓国の paradigm からすれば、日本人は信用できず、また韓国を支配しに来ると考えているのかもしれない。

日韓双方の社会に存在する 誤った stereotype と paradigm そして Final Vocabulary を打ち破ることこそが、日韓の未来志向の新たな関係を築く。